

## 中高年女性の文化実践と社会参加

Middle and advanced aged women's cultural practice and social participation

金 惠媛

KIM Hyeweon

〈요지〉

본 논문은, 문헌고찰을 통해, 일본 한류의 주된 수용자인 중고년여성들의 문화실천의 특성 및 사회참여 행동으로의 전환 가능성에 대해 살펴보는 것을 목적으로 한다. 이는, 한류가 한차례 지나가는 흥역처럼 종결되는 것이 아니라, 계속해서 일본 사회문화의 한 흐름을 엮어내고 있는 것에 대한 해답을 찾는 것이기도 하다.

필자는 일본의 한류를 설명하는 키워드로 ‘발전’을 들고 싶다. 이는 일본의 한류가 중고년 여성을 중심으로 하는 문화실천행동으로 발전했으며, 결과적으로는, 사회적 존재로서의 중고년여성의 발전, 보람업형 한일관계의 발전, 더불어 문화실천이 능동적 사회참여로 이어질 가능성을 보여주었다고 생각하기 때문이다.

일본의 한류와 관련해서 주목되었던 주된 주제들 중, 문화의 산업화, 문화전파방향의 변화는 어쩌면 예측 가능했던 상황이라고 할 수 있겠다. 다소 낯설기는 하나, 문화의 혼종화, 글로벌화라는 큰 흐름 속에서 보면, 이미 예정된 수순이라고 해석되는 면이 없지 않기 때문이다. 그러나 중고년여성이 대중문화 소비의 주역이 된 것은 예상외의 전개가 아니었을까? 그녀들은 단순한 문화소비로 중지부를 찍지 않았으며, 다양하고 지속적인 문화실천을 통해 자신들이 어떤 사회적 흐름의 주체가 될 수 있음을 확실히 보여주었다.

중고년여성의 문화실천에 의한 또 하나의 발전은 새로운 한일관계의 가능성을 제시했다는 것이다. 한류 이전의 한일관계에 있어서 중고년여성은 주변적인 존재였다. 종래의 양국 관계가 주로 정치경제적 과제를 중심으로 형성되어 온 점, 여성에 대한 사회적 기대가 주로 재생산 영역에 한정되어 온 점 등, 중고년여성이 주체적으로 한국에 접하기 어려운 환경이 계속되었다는 것을 주된 이유로 들 수 있을 것이다. 그러나, 한류열풍과 함께 전개된 그들의 문화실천은 종래의 소극적이고 경직된 양국관계를 개선하는 유력한 방법으로서 주목되었고, 다양한 주제, 분야에 의한 교류가 가능하다는 것을 보여준 것이다. 즉, 보람업형 한일관계의 유효성을 확인시켜주었다고 할 수 있겠다.

또 한편으로는, 지극히 개인적인 활동들이 공공적 의미를 동시에 내포하고 있음을 확인시켜주기도 했다. 중고년여성의 문화실천은 다양한 네트워크를 형성하여 이를 유지, 확대, 활성화시켜 가는 양상을 보이는 것이 특징적이다. 고령화 사회의 진전과 함께 다양한 분야, 세대, 그리고 지역사회에 있어서의 네트워크의 활성화가 강조되고 있는 가운데, 고령화 사회의 압도적인 다수를 차지하는 중고년여성이 사회적 자원으로서 활약할 수 있는 환경 조성이 중요한 과제로 대두되고 있다. 대중문화를 계기로 한 평생학습의 실천, 인터넷의 활용, 끼리끼리 문화를 통해 새로운 교류 관계를 형성, 활성화시키고 있는 한류 팬의 능동적인 문화 실천은, 그러한 과제 해결에 대한 가능성을 시사함과 동시에, 고령화 사회에서의 사회참여의 모델을 제시해 주었다는 데서 더욱 의미가 있다.

キーワード：韓流、中高年女性の発見、文化実践、ボトムアップ型日韓関係、能動的なつながり、社会参加

## 1. 韓流へのまなざし

韓流は、日本の中高年女性を説明するキーワードの一つとなった。この指摘に異論を唱える人はおそらく少数であろう。韓流ブームが日本を席卷したのは2004～2005年頃である<sup>1)</sup>。韓国ドラマ「冬のソナタ」、主演俳優ペ・ヨンジュン人気に始まるこの流行現象は、韓国、あるいは大衆文化への関心の有無を問わず、幅広い層において非常に認知度の高い、一大社会現象であった<sup>2)</sup>。NHK放送文化研究所が総合テレビでの放送終了直後である2004年9月1日～10日に行った世論調査によると<sup>3)</sup>、「冬のソナタ」が日本で放送されていたことを知っている人は調査対象者の90%、実際にドラマを見た人は38%となっており、認知度、視聴経験レベルともに極めて高い。特に主要視聴者層とされる30代から50代の女性の認知度は96～98%の高率であった。

ところで、このブームを予期できた人は果たしてどのくらいいたのであろうか。2002年W杯日韓共催の発表(1996年)、韓国における日本大衆文化開放の段階的実施の開始(1998年)などをきっかけとする旅行者や交流行事の増加などをその前兆として指摘することができるかもしれない。さらには1990年代末から中国や東南アジアで起こっていた韓流ブームの波が、日本にも何らかの影響を及ぼすだろうと予想できたかもしれない。しかし、ブームの圧倒的な規模と広がり、中高年女性が中核的な存在となり、多種多様な文化実践を巻き起こすようなことは、全く予想外の展開であったと言っても過言ではないだろう。

この未曾有の出来事を受けての対応や解釈が非常に多岐にわたっていることから、ブームの唐突さ、社会的影響の大きさを推察することができよう。そこで、韓流現象に対応して起きた動きを時系列に見てみると、2003年～2004年頃は、社会の関心が中高年女性のファン行動から広がることはほとんどなく、関心の表れとしても、出版界や旅行会社を中心とする商業的な動きが主流であった。しかし、2004年の後半からは韓流ブーム及びその背景に関する学術研究も加わるようになり、韓流は一層多様な切り口から語られるテーマとなっていくのである<sup>4)</sup>。韓流ブームをめぐる関心、研究は、ドラマや俳優に関する解説、関連情報の提供から始まり、次第に語学や文化学習、観光などの文化実践の方へ、さらには受容者分析や日韓関係、文化産業に関する考察へと広がっていく。出版動向を手掛かりに韓流ブームを受け止める日本社会の動きをまとめた黄によると<sup>5)</sup>、「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブーム

が中心であった初期(2003年～2004年前半)の頃は、原作関連の書籍やDVD、CDといった、いわばNHKがドラマの総合案内をするような状況が続いた。しかし、NHK地上波放送(2004年4月～8月)以後は、韓流スターやドラマに関する詳細な情報分析、ロケ地観光ガイド、語学本、料理本など、当時の話題性を利用した本格的な出版ラッシュが、多様な出版社によって手掛けられている。研究者による著作は、2004年末の『日式韓流』を皮切りに、2005年以降、増加がみられるようになる。大衆文化、ジェンダー、日韓関係、文化産業、地域研究などをキーワードに、多様な分野において学際的な研究交流が行われてきた。一方、想定範囲内の流れともいえるが、韓流を素材の一部にして「嫌韓論」を展開する『嫌韓流』の出版も2005年以降その勢いを増していくのである<sup>6)</sup>。

テレビ放送からも同様の変化が観察される。ブームの当初は、従来からあったエステやグルメなどの韓国観光情報に加えて、「冬のソナタ」やペ・ヨンジュン関連の情報がゴシップ的に取り上げられる程度であった。しかし「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブームが高まるにつれて、ドラマやスターの魅力、韓流受容者の熱狂的なファン行動に焦点を当てたものが増えていった。また、多様な韓流スター、韓国ドラマへと関心が広まり、「冬ソナ」ブームから韓流ブームへと拡大していく。

このような変化とともにテレビ界の動きとして最も注目されるのは、2004年以降、日本のお茶の間に韓国ドラマが大量導入されるようになったことであろう。ミーハーの成立には、「対象を身近に感じられるテレビ、DVDなどで自宅で反復視聴が可能なコンビニエントな環境」が最大の条件であるという指摘があるが<sup>7)</sup>、これはまさに、テレビドラマ、中高年女性、反復視聴という韓流の特徴と重なる。「冬のソナタ」に続き多くの韓国ドラマがテレビ放送を通じて日本に継続的に紹介されたことが、韓流ブームの高潮につながったものと考えられる。テレビという最も日常的な媒体において韓流作品が多数取り上げられたことが、韓流ファンにおける中高年女性の比重を高める一方で、年齢も職業も多様な幅広い層からも支持を得やすくなったのではなからうか。そして、ブーム現象を持続させる原動力もまた、テレビにおける韓流作品、スターの持続的な露出によって、視聴者の興味を継続的に誘発、サポートできたことに求めるべきであろう。まさに、韓流の日常化である。韓流ブームの発生からおよそ5年が経過した現在、ピーク時の勢いこそなくなっているものの、依然としてたくさんの韓国ドラマが日本の

テレビで放送されている<sup>8)</sup>。受容者のニーズをテレビが担ってきた韓流の特徴、健在を示す一面として考えられる。

ところで、韓流ブームをめぐって、語る側の姿勢の変化が最も顕著に表れたのは、中高年女性のファン行動に関する眼差しではなかろうか。そしてそれは、ファン行動がミーハー的に、つまり単なる「有名人の消費」に終わるのではなく<sup>9)</sup>、多様な文化実践へと発展していったことによる変化であると考えられる。そしてこのまなざしのもう一つの変因が、韓流ブームの波及効果に対する期待にあることも否定できないだろう。これらについては後述するが、ここでは、もう一つの要因として、韓流ブームの持続性に注目したい。日本はもちろんであるが、韓国においても、韓流ブームという予想外の出来事を受けての混乱がみられた<sup>10)</sup>。一時的な現象である、あるいはブームの原因は韓国（伝統）文化の優秀性にあるとする議論がそれらである。たとえば、中国文化圏において起きていた韓流ブームについては「開放と経済力の向上による外来大衆文化消費欲求が急増したことによる一時的な現象」と診断されている<sup>11)</sup>。後に、日本での韓流ブームを受けて韓国のなかに広がった戸惑い、あるいは文化ナショナリズムの浮上も同じ文脈で解釈することができよう。

ブーム当初の支配的な見方であった「韓流は一過性に過ぎない」とする予想を裏切って、韓流は日本社会の日常の一部として定着するようになった<sup>12)</sup>。いわば、「流行のピークが過ぎても、一定のレベルで生活習慣や消費対象として残存する“定着性の流行”を生み出した」のである<sup>13)</sup>。それとともに、韓流の語られ方にもしだいに変化がみられるようになり、ブームの背景要因に関心を寄せる考察が増加しはじめた。作品や俳優の紹介、中高年女性の熱狂的なファン行動、文化産業による経済効果などといった話題提供型の書物の出版ブームも落ち着いてきた。そして、日本社会の今日的課題として日韓関係や在日コリアン、中高年女性に注目するなど、韓流ブームを手掛かりに日本社会のいま、そしてこれからに目を向ける試みが多く観察されるようになったのである<sup>14)</sup>。

韓流の持続、日常化は、韓流に対する多様な解釈、その社会的意義についての本格的な考察を迫るものでもある。韓流ブームは、いまなお進行形であるとする意見も少なくないが<sup>15)</sup>、韓流ブームは果たして日本社会に何をもたらしたのであろうか。また、韓流をめぐっては、中高年女性の横のネットワークの有効性が注目されたが、これは、高齢化社会で求められるシニアの社会参加に何らかの示唆を与えるものであろうか。以

下、このような疑問を解き明かすべく、韓流をキーワードに、中高年女性に対する社会のまなざしの変化、日韓関係への影響、そして、個人の能動的つながりと社会参加について考察する。

## 2. 中高年女性の発見

日本の韓流ブームのもっとも大きな特徴は、中高年女性の私的活動が社会的な文脈のなかでクローズアップされたこと、ボトムアップ型の日韓関係を提示したこと、そして、ファン行動が文化実践につながっていること、この3点に絞ることができるのではなかろうか。そして、この3つの特徴に通底するものこそ中高年女性の「発見」であろう。ここで中高年女性の「発見」とは、中高年女性個々にとっての発見、日本社会の中高年女性発見、さらには中高年女性によって顕在化した諸問題を通しての日本社会の新たな可能性の発見、といった多義的な用語として用いられよう。

中高年女性の存在感を鮮明にした直接的な契機は、初来日するベ・ヨンジュン氏の空港出迎えの場面、あの熱狂的なシーンであったことは言うまでもない。それ以前にも、「冬のソナタ」の人気、及び感動を受けた視聴者仲間が多く存在するという情報は、一定範囲内の人々の間では共有できていたかもしれない<sup>16)</sup>。しかし、それはあくまでも番組関係者や視聴者の間の口コミのレベルであり、一大社会現象に発展するまでの勢いがあったとは言い難い。世間一般のほとんどの人にとっては、まったく予想外の、異様な光景であったに違いない。空港に詰めかけたファンの数や年齢層、出迎えの対象が韓国の芸能人であることなど、すべてがいまだかつて見たことのない珍事だったのであり、この意外さが、人々の好奇心、疑問を一層増幅させたのではなかろうか<sup>17)</sup>。事実、韓流ブームを伝えるマスコミの姿勢は、中高年女性のファン行動と比べても引けを取らないほど熱狂的であり、彼らの戸惑い振りがよく表れていた。

このように、韓流ブームを通して中高年女性が鮮烈な社会デビューを果たしたのだが、彼女らが社会的な文脈のなかでクローズアップされることがいままでもまったくなかったわけではない。代表的な例として、日本の懸案課題とされる高齢者の介護問題を語る際、中高年女性は介護の主な担い手として、同時に、要介護者の多数を占める性として常に注目される対象であった。従来のまなざしと明らかに異なる点は、中高年女性の趣味活動、いわば私的領域に社会が注目したことであろう。大衆文化の消費者としてはもちろんの

こと、日本の公的な場において中高年女性が主体的な個として語られることはこれまでほとんどなかったのである<sup>18)</sup>。

その最たる例が、中高年女性と最も親和的な関係にあるはずのテレビ番組作りにおいて、視聴者としての中高年女性の存在感が極めて薄いということであろう。このことは韓流ファンが中高年女性に多い理由としても指摘されている。すなわち、日本のテレビは、若者に偏向的であり、結果として、韓国ドラマが中高年女性の受け皿となったという指摘がそれである。映画評論家の佐藤は、中高年女性を、若者中心の日本のテレビに「切り捨てられた層」であるとしたうえで、若者の生活の断片に焦点を絞る日本のドラマと違って、韓国ドラマは家族や家庭などを考えさせる内容となっているところから、中高年女性の支持が得られていると分析する<sup>19)</sup>。このことは韓流ファンに既婚の中高年女性が多い状況からも説明できよう<sup>20)</sup>。台湾の韓流ファンについて調査研究を行った金は、韓流ブームを楽しむ既婚女性たちの情熱と連帯が、従来の家庭内での関係秩序に変化をもたらすとともに、自らの「文化『権力』の場を構築」させたと言及し、女性の主体化に注目する<sup>21)</sup>。

ある中高年女性ファンが、『冬ソナ』が単に好きなのではなく、『冬ソナ』が好きな自分が好きなのかも』と自らのファン活動をふり返るインタビューからも<sup>22)</sup>、ファン活動から自己実現の可能性を模索していることがわかる。韓流ファンのファン行動は、「ファンである」「ファンを演じる」「他のファンとつながる」といった重層的な構造をもっているのである。ここから彼女たちが、単なる文化消費にとどまらず、多様な文化実践を展開することができた理由を読み取ることもできよう。結局、韓流ブームは、日本の中高年女性と社会がともに、中高年女性の私的世界を「発見」し、それを社会的な文脈で読み解く初めてのきっかけを提供した社会現象であったのではなかろうか。

### 3. ボトムアップ型の日韓関係

中高年女性の韓流活動は、日韓関係にどのような「発見」をもたらしたのだろうか。韓流の文脈において日韓関係は、文化伝播の方向性、文化交流による両国関係改善の可能性、そして歴史と文化の乖離状態の是非、この3つを争点に語られることが多かった。そしてこれらの議論が目指す着地点は、より発展的な日韓関係のための環境作りにあったといえよう。

日本は、1990年代を通してアジア地域に大衆文化を

もっぱら輸出する国であった。そして、アジアのその他の国同様、韓国も実質的には日本大衆文化の影響を少なからず受けていた。韓流の日本上陸は、従来の文化伝播の流れとは異なる動き、いわば周辺と中心が逆転した形勢として受け止められ、すでに述べたように、両国にはある種の戸惑いのような反応も見られた。事実、それまでの文化環境を振り返ると、日本に韓国の大衆文化が本格的に紹介されたのは1990年代半ば以降であった<sup>23)</sup>。したがって、ごく最近まで韓国は日本の大衆文化の影響を一方的に受ける国であり、日本にしながら韓国文化にアクセスすることは容易ではなかったのである<sup>24)</sup>。

韓国同様、日本の大衆文化界においても、輸入作品の多くはアメリカのものであった。特に「冬のソナタ」が初めて放送されたNHKのBS2の海外ドラマ枠では、それまでアメリカの作品を主に扱ってきたのであり、「冬のソナタ」の放送は、まさに異例尽くしの選択であったそうである<sup>25)</sup>。このような経緯から、番組選定に当たって、韓国ものが視聴者に受け入れられるかどうか担当者は悩んだという<sup>26)</sup>、小倉は、むしろこの枠での選択が韓流ブームの形成に功を奏したと説明する。「民放テレビに飽き飽きしてしまっていた『真面目な』層が、NHKという『真面目な』局が流す『真面目な』ドラマであるがゆえに安心して容易に自己を没入させた」と指摘し、とりわけ「知的好奇心が旺盛」である上に、「伝達能力」にも優れている衛星放送の視聴者が第1回目の放送の対象者であったことが「冬のソナタ」成功の秘訣の一つであったとする<sup>27)</sup>。

さらに、韓流ブームの起爆剤となった「冬のソナタ」が、韓国色の薄いドラマであることも、韓国に接点を持たない中高年女性の韓流へのアクセスを容易にしたと考えられる。番組選定にかかわった三井は、「冬のソナタ」は、濃厚な人間関係を描くことの多い従来の韓国ドラマに共通するものが少なく、「韓国ドラマの王道というより、異端児」であるとする<sup>28)</sup>。さらに、主演の二人が「韓国の俳優さんなのに、見るほどに日本人よりも日本人らしく見えてくる」ので日本人視聴者にとって違和感がなく、また、作品全体としても韓国色が薄いことを指摘している<sup>29)</sup>。そして、セリフの美しさを「冬のソナタ」の魅力として挙げる人が多いことは周知の事実であるが、番組担当者は、「吹き替え版の制作で一番注意した点は、登場人物の切ない心情が伝わる、自然体の日本語」であったと振り返る<sup>30)</sup>。実際、ある視聴者は、テレビに映ったペ・ヨンジュンを見て「日本人と欧米のハーフ」と思ったが「韓国の俳優と言われて、『えっ?』」と思ったという<sup>31)</sup>。つ

まり、ドラマの導入時点においては、とりたてて韓国を意識させるものではなかったものであり、だからこそ、それまで韓国と接点が薄いとされていた中高年女性が「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブームの担い手となり得たのかもしれない。

韓流ブーム以前、韓国は、ほとんどの中高年女性にとっては接点の薄い国であったといえよう<sup>32)</sup>。この点について小此木は、従来の日韓関係に照らして韓流ブームが非常に驚きであるという意見とともに、中高年女性と韓流という意外な関係について、「最近の『韓流』は信じられない。ありえないと思っていたことがおきたという意味で、何か不思議な気持ちになる。しかも、そのブームを主導したのは、韓国文化に強い偏見を持っていた(失礼!)中年女性層だったのである。」とし、だからこそ韓流パワーは歴史問題などで拗れがちな日韓関係をしっかり支えていく原動力となるのでは、と力説する<sup>33)</sup>。

中高年女性と韓国の間には日常的な接点が希薄であったということは、中高年女性が韓国について無関心、あるいは否定的な見解をもっていたからかもしれない。しかし見方を変えると、中高年女性が、韓国に接点を持つような環境が、これまでの日韓関係において許されていなかった、とも指摘できるのではなからうか。これについて毛利は、中高年女性の韓国認識が韓流前後にどのように変化したのかをインタビュー調査し、「冬のソナタ」を通じて、中高年女性は「ある意味で初めて韓国を語る自分たちの言語を獲得した」のでは、と指摘する<sup>34)</sup>。日韓の複雑な関係と女性の社会的地位の両方の問題を捉えた知見といえよう。

ところで、韓流ファンに向けられるもっとも多い批判の一つは、韓国認識に関するものである。「無批判的に」「一部情報だけで」「韓国スターばかり見て」韓国を知ったつもりでいる、本当の韓国、日韓関係について知ろうとしない、というのが主な批判内容である<sup>35)</sup>。このような批判に対して、あるファンが、韓国文化も欧米文化のように、「文化として単純に楽しんで良いのでは」、「文化を楽しんでいるうちに徐々に知っていても良いのでは」と応じているが<sup>36)</sup>、実際、韓流ファンのなかでこのような認識を持つ人は少なくないだろう。

韓流ファンがミーハーレベルにとどまっていたのであれば、韓流作品や好きな芸能人の背景にある韓国や日韓関係に関心が広がる可能性は限りなく低いだろう。韓流ブームをミーハーの観点から検討した島原は、ミーハーは「自分にとって心地よく、眺めやすい『景色』だけを見て」いる傾向があると断ったうえで、特

に「センシティブな関係にある日本と朝鮮半島ゆえに、歴史や政治といった分野には深入りしたくないのかも」と指摘する<sup>37)</sup>。まさに前述した韓流ファンと批判者の間にあった攻防の通りである。

そこで、韓流ファンと韓国イメージの関係をNHK放送研究所の調査結果から見てみよう。番組を見たことのある人を対象に意識面への影響を調べているが、「韓国のイメージが変わった」「韓国への興味が増した」「韓国文化に対する評価が変わった」と、韓国関連の項目が上位を占め、ドラマ視聴が韓国イメージに肯定的な影響を与えている様子がうかがえる。また、見ている人も含めて「冬ソナ現象」について尋ねたところ、「きっかけはともかく、韓国に対する関心が高まるのはよいことだ」が最も多い<sup>38)</sup>。「冬のソナタ」が、視聴の有無にかかわらず、日韓関係に一定の影響を及ぼしていることが見て取れる。

確かに、大衆文化、とくに今日のように混種性に富む文化を楽しむうえで、その文化の属性を強く意識する必要は必ずしもないかもしれない。また、ミーハー的関心から始まったという事実から、ある意味、韓流ファンの中高年女性もつ韓国イメージは、ご都合主義的で非常に不安定なものかもしれない。しかし、日韓の長い関係史の中で皆無に等しかった民間の視点、女性の視点が新たに意識されることの意味は大きい。さらに、中高年女性の「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブームから始まった韓流ブームが、中高年女性の文化実践を促し、それが、主体的な韓国理解につながっているという現状は、まさに「文化の対話力」の活用である<sup>39)</sup>。筆者はこれを、従来の公的・垂直的關係とは異なる、私的・水平的な文化交流がもたらした両国関係、いわば「ボトムアップ型日韓関係」と呼びたい。「従来の日本からの韓国への眺め、あるいはアジアへの眺め」に内在していた「オリエンタリズムの眼差し」を克服する可能性を示唆するものであり<sup>40)</sup>、日韓の新たな関係性の提示につながるものとして、注目に値しよう。

#### 4. 個人の能動的なつながりと社会参加

中高年女性の発見の中で最も注目される部分は、「個人の能動的なつながり」ではなからうか。これは、すでに述べた新しい日韓関係への試みや社会的文脈での中高年の発見とも相通ずるところがある。結局のところ、韓流ファンが、韓流の何に、なぜ注目し、それをどのように受容していったのかを解き明かしてくれるものであり、韓流の今後の方向性を示唆するものでも

ある。個人が能動的なつながりを形成、維持していくためには、私的な人間関係に広がりを持たせるとともに、趣味領域を日常化・充実化させていく必要があると考えられるが、韓流ファンによる文化実践の特徴がまさにそうである。

韓流人気については、作品やスター、あるいはその背景的なものなど、多様な側面からの検討が行われてきた<sup>41)</sup>。韓流ブームのきっかけとなったドラマ「冬のソナタ」の担当ディレクターであった小川は、視聴者からの手紙のなかに、「今生きていることのつらさや今の日本社会への不安がにじんだものが少なくない」と指摘する。そのうえ、「冬のソナタ」は、視聴者に「人生を振り返らせ」、「人とどうやって関わりながら生きていけばよいのか」を考えさせたドラマであったのであり、それがドラマへの反響につながったのでは、とドラマ放送後の状況をふり返る<sup>42)</sup>。

ところで、韓流ブームの中核をなす韓国ドラマについては、メロドラマが主流であり、複雑な人間関係、非現実的な事件、事故の連続など、現実性に乏しい、だから若者が距離を置くという批判が少なくない。中高年女性が韓国ドラマの魅力として挙げる要素、たとえば、純愛、家族愛や夢に向かってのひたむきさなどは、いまの日本でクールとみられているものとは確かに距離があるように思える。しかしその一方において、「世界の中心で愛をさけぶ」「電車男」など、2000年以降、純愛や初恋をテーマとする作品が、若者の間でも爆発的な人気を得ている<sup>43)</sup>。前述の小川の指摘にあったように、ひととのつながりの中で生まれるピュアな気持ちや癒しは、世代を問わず支持されていたのであり、日本社会が求めていた感性であるかもしれない。

韓流の魅力として高い支持を得ている「なつかしさ」に関しても同様のことが確認できる。「なつかしさ」とは時差を前提とする見方であり、よってオリエンタリズムになりかねないと危険性を指摘する意見が多いなか、岩淵は、実際の中高年女性ファンにとって「なつかしさ」は前向きな要素として、自己啓発を促す要素として用いられている傾向があると指摘する。ノスタルジアは「過去を参照することで現在・未来をより建設的にとらえ返すことを可能にすることもありうる」とした上で、「冬のソナタ」の場合、「自らの純愛感情に向けられたノスタルジアは視聴者の日常に彩りを与えて活性化し、さらには多くの人々が「恋愛感情にとどまらず、すべてを包み込むような人間への優しさと尊敬の念、真摯に互いを気遣う対人コミュニケーションのあり方の大切さを改めて肯定的に思い起こしていた」とする<sup>44)</sup>。韓流によって、他人への優しさと

尊敬の念など、ひととのかかわりにおいて最も重要だと思われる気持ちや行動が、実生活に投影されたのである。だからこそ韓流に対して、韓流を楽しむ自身に対して、前向きな意味づけが可能なのであろう。韓流スターの魅力として「ストイック」、「真面目さ」、「礼儀正しさ」などを挙げるファンが多いことも同じ観点から読み解くことができよう。

中高年女性は韓流を手掛かりに、自らの趣味の世界を開花させ、さらに自己啓発の努力を積み重ね、「生き生きとした」世界を構築してきたのではなかろうか<sup>45)</sup>。中高年女性は、年齢と性役割から、「妻」「母」「嫁」といった家庭内の役割に埋没しやすい。「何よりも成人した子供へのエネルギー集中を避け、『子離れ』するためにヨン様が使われたのだ。子どもの立場からすれば漬物石のように重かった母親が熱狂の対象を外に向けてくれただけでも大歓迎」だという分析にみるように<sup>46)</sup>、韓流によって、家族関係における共依存関係を解消し、個としての意識を顕在化させたところに韓流ブームの最大の功績があるのかもしれない。

ソーシャル・ネットワークの多様化、趣味領域が個人の生活に占める比重の増大は、もはや時代の趨勢である。日本人を対象に行った価値観調査によると、2005年現在、自分の生活にとっての重要度は、「家族」97.5%、「友人・知人」92.8%、「余暇時間」90.1%、「仕事」84.9%、「政治」61.4%の順となっている<sup>47)</sup>。このうち、時系列にみて特に変化が大きい項目は「余暇時間」であり、1990年の79.6%から10%以上も増加している。仕事や政治といった公的な関係より、家族や友人・知人などの私的なかかわりに比重をおきながら、余暇時間の充実化を図っている様子が見て取れる。

このような価値観は、「アンチエイジング」「アクティブエイジング」を目指す高齢化社会においてよりいっそう重要な意味を持つといえる。ミーハー研究家の島原は、高齢期の長期化への対応として「趣味嗜好を軸としたアイデンティティを自覚的に模索し、構築しておく必要がある」と指摘する<sup>48)</sup>。さらに、「血縁や地縁などの人間関係よりも、個人の趣味嗜好やそこから発生する人とのつながりを優先させて生きる人たち」を「趣民」と命名し、趣民共同体の活性化を提案する<sup>49)</sup>。また、興味の対象が必ずしも趣味や学習である必要はなく、「市民運動やボランティア活動なども、『趣』に含めたい」としている<sup>50)</sup>。少子化、高齢化、遠距離別居の増加などから、家族扶養だけ、あるいは次世代からの扶養だけで高齢者扶養負担に対処することが非現実的であることは周知の事実である。高齢化が進展すればするほど、家族ではなく、「家族のような」関係、

不定形で、かつ能動的なつながりを増強していかなければならない。そしてこのことは、高齢者扶養とまったく無関係ではいられない、高齢化社会を生きるすべての人に言えることであろう。一見、私的活動に映りやすい中高年女性の韓国語学習、韓国文化学習、交流活動などが、実は、日韓関係の改善、アクティブな高齢化社会環境の創成に貢献する社会活動として期待される所以である。

韓流ファンの文化実践を社会参加の一環とする観点から、インターネットや携帯電話などの電子媒体の活用が特徴的であったことにも注目したい。ネット社会がもつ匿名性やアクセスの利便性、膨大な情報量は、同好会などの横のネットワークを作る上で強力な味方となるのであり、現に、韓流ブームを広めた原動力の一つとされている。そしてなにより、中高年女性が韓流をきっかけにネット媒体と親和的な関係になり、人的ネットワークの活用にかわめて有効な表現ツールを獲得したことの意味は、いくら強調してもし過ぎることではないだろう。中高年女性個人にとってはもちろんのこと、日本の懸案課題である、健康、情報伝達と社会参加を軸とするアクティブな高齢化社会の実現に及ぼす社会的影響は極めて大きい。

電通の調査によると、中高年女性のインターネット利用は、50代28.2%、60代15.2%、70代6.4%と低く、30代以下の年齢層との差が大きいのはもちろんのこと、同年代の男性と比べてもおよそ半分以下の水準にとどまっている<sup>51)</sup>。このような現状に反して、韓流ファンの中高年女性が、ブームを契機にインターネットを駆使できるようになったことは、今後の社会参加に向けてのあらゆる可能性を高める要素として積極的に評価できよう。事実、「インターネットの普及によって、(身近な)生活・社会のなかで変わったことは何ですか?」(MA)という問いに対し、「社会参加」を選択した比率は、全年齢層の6.1%に対し、50代では男性6.1%、女性8.7%、そして60代では男性9.4%、女性14.7%と相対的に高率を示す。50代以上で、男女ともにその他の年齢層の2~3倍の高率を示しており、高齢期におけるインターネット利用と社会参加が正の関係にあることを示す数値の一つとして考えられる。高齢になるにつれ、現役から退くことが多く、社会参加にも消極的になりやすい現状からして、韓流ブームが中高年女性のインターネット利用のきっかけとなり、積極的な社会参加に続いたことは、今後のアクティブエイジングを展望する上で多くの示唆を与えてくれる。

以上、中高年女性の文化実践の特徴及び波及効果を中心に、韓流受容の現状について考察した。韓流ファ

ンが大衆文化の消費者にとどまるのではなく、プロシューマーとして、様々な文化実践者として活動を展開できたのは、家族や人間関係に対する関心、趣味領域の充実化、そして情報機器を駆使しながらの仲間作りが大きな原動力となったといえよう。そして、ファン活動や文化実践といった一見私的に思える活動が、実は極めて公共的な意味を持ち、社会的な影響を及ぼしていることが確認できた。とりわけ、日韓の新たな関係性の模索、高齢化社会におけるシニアの社会参加の活性化など、日本社会が抱える懸案課題の解決に多くの示唆を得ることができる。さらに、社会文化的な文脈での中高年女性の発見は、女性がマジョリティーとなる高齢化社会に対する明るい兆しとして、評価されるべきであろう。

#### <注>

- 1) 韓流とは、1999年に中国の北京、「青年報」で韓国の大衆文化や芸能人におぼれている若者たちの流行を警戒する意味で初めて使われた言葉である。現在ではもっぱら肯定的な意味で用いられることが多いが、韓流はそれと音が同じである「寒流」を含んでいる否定的な意味が込められた言葉だった(中央日報05年1月3日付(大門(2005:7)より再引用))。日本では、2003~2004年に「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブームが続き、韓流ブームへ広がった。
- 2) 韓流ブームのきっかけとなったドラマ「冬のソナタ」は、2003年4月(BS放送)の第1回から2004年12月まで計4回も放映されており、その人気ぶりをうかがわせる。
- 3) 調査対象は、全国の15歳~79歳の男女2200人(有効調査数1289人)である(三矢(2004:13))。
- 4) 「冬ソナ」ブーム、「ヨン様」ブームに始まる韓流現象の語られ方については、黄(2007:251-287)、及び石田ほか編(2007:7-39)の韓流出版物の時系列特徴をみると、わかりやすい。
- 5) 黄(2007:253-254)。
- 6) 『嫌韓流』は、2005年7月から2007年8月の間に第3巻まで発行されているが、同期間、類似したタイトルの本が多く出版されている(黄2007:283-286)。
- 7) 島原は、映画を中心とする90年代末の香港ブームとテレビ中心の韓流ブームを比較し、ブームとテレビの密接な関係について指摘する(島原(2007:

- 27-28))。
- 8) ちなみに、新聞の週刊番組表で韓国ドラマの放送状況を見ると、2009年12月6日～12日の一週間の間に、BSで16本、地上派で2本の計18本のドラマが放送されている。ピーク時に比べ地上波で見る機会は減ってきたものの、依然として非常にたくさん番組が放送されていることがわかる。また、韓流ブームの初めの頃は、韓国での放送時期と時差のある多少古い作品が多かったが、最近、韓国で放映が終わったばかりの作品が放送されることが多く、日本での放送のためのシステムが整備されていることがわかる。
  - 9) 島原 (2007: 24)。
  - 10) 韓流ブーム当初の混乱状況については、チョハン・ヘジョン (2003: 1-42) に詳しい。
  - 11) 「韓流熱風 落ち着いて対応しよう」(『韓国日報』、2001年8月29日付)。
  - 12) 小倉は、日本のメディアで韓国語が頻出しても、もはや不思議に思わなくなったのではと、日本において日常的に韓国に接する環境が整ってきたことを指摘する (小倉 (2007))。
  - 13) 三矢 (2004: 22)。
  - 14) 主な韓流研究に関しては「『韓流』関連図書」(石田・木村・山中編、2007: 7-39) 及び「補論 韓流本の世界」(黄、2007: 251-287) に詳しい。参考までに「韓流」をキーワードにCiNii (国立情報学研究所論文情報ナビゲータサイニイ) で検索してみると、2002年から2009年12月現在で計408件がヒットする。時期別本数をみると、2005年が171件で最多であり、2006年が93件、2004年が76件と続く。内容別では、2003～2004年は、韓流作品の紹介や経済面、政治面に着目したものが多く、韓流受容者に関する研究は2005年以降が主である。
  - 15) すでに韓流ブームは終わったとする見方が一般的かもしれない。ところで、筆者が山口の大学生を対象に行った調査をみると、ブームは「もっと盛り上がると思う」及び「これからも続くと思う」の合計約40%、「勢いは衰えるが、日本の社会文化の一つとして定着していくと思う」が40%と高く支持され、反対の意見として「続かない」、「すでに終わっている」は合わせて20%を下回っている。ここで注目すべき点は、ブームが今後も続く、盛り上がるとする見方である。しかも、韓流ブームの主演ではないとされる大学生の先読みであることにも一考の価値があるのではなかろうか。
  - 16) 参考までに『朝日新聞』を例にみると、「冬のソナタ」の記事が新聞紙上に初めて登場したのは、2003年4月16日の<ひととき>欄で、ドラマの内容に感動したという41歳の女性会社員の投稿であった。以来、ドラマや俳優に関する質問、感想が次第に増加していくようになる。それまで韓国大衆文化の代表格とされ、「シュリ」以来関心が高まるようになった韓国映画の話からドラマ「冬のソナタ」、主演俳優のペ・ヨンジュンの話へと関心がシフトしていく様子が見て取れる。
  - 17) 「韓流ファン＝中高年女性＝ミーハー」という図式が人々の脳裏に刻印されてしまったのも、この時の残像が強烈であったことを物語っていよう。なお、新聞記事を分析した研究によると、ファン層は「8歳～90歳」と幅広いが「すべてに該当する特徴的なファンの世代は、30～50代」という。また、『「ヨン様」の「～様」付けが「杉さま』などに象徴的に見られるように、いわゆる『オバサマ文化』からのもの』だったことから『冬のソナタ』ファン＝「ペ・ヨンジュン」ファン＝中年女性」というイメージが固まったという (李 (2004: 101))。
  - 18) 学術的課題として韓流現象にいち早く注目し『日式韓流』を編著した毛利は、それまで大衆文化研究が若者偏重型であったこと、韓国を研究対象とあまり想定してこなかったことから昨今の「冬ソナ」「ヨン様」ブームに戸惑いを隠せない、だからこそ韓流に興味を持つようになったと述べている (2004: 14-16)。
  - 19) 笠間・京極・菊池ほか (2005: 15)。
  - 20) ペ・ヨンジュンファンに対するインターネット調査でも、既婚女性がファンの多数を占めている (咸・許 (2006: 41))。
  - 21) 金 (2007: 126-127)。
  - 22) 毛利 (2004: 39)。
  - 23) 1994年に映画『風の丘を越えて』が韓国映画として戦後初めて日本で公開された。しかし、一般の日本人に韓国映画としてより鮮烈な印象をもって受け入れられたのは、2000年に公開され130万人の観客を動員した『シュリ』であろう (チェ (2005: 7))。実際、『シュリ』を見て、韓国語の勉強を始めたという新聞投稿もあり (『朝日新聞』「声」欄、2002年5月12日付)、韓流の先駆けと評価される作品である。
  - 24) 「(1980年頃までは) 韓国映画って劇場では見られなかった…レンタル・ビデオ屋で借りようと思っ

- でも、『韓国エロス』というコーナーしかなかった…今やTSUTAYA…韓国映画・ドラマという棚が四つぐらいありますから、時代はかわった」(李・四方田 (2005:21))とする四方田の指摘からは、日本における韓国大衆文化の受容状況が韓流以前と以後で全く変わっていることがうかがえる。
- 25) 三井 (2006:1)。  
 26) 同上。  
 27) 小倉 (2005:73-74)。  
 28) 三井(2006:1)。  
 29) 上掲書。  
 30) これは文化の既視性を意識したものと判断される。「冬のソナタ」では、外見やストーリーにおける類似性を有効に活用するために、従来のアメリカドラマで採用したような「欧米ものの吹き替え方式にとらわれず、バターくさい気どりを脱色した」話し方にこだわったという (三井 (2006:4))。  
 31) 「論座」(2005.11:215)。  
 32) サッカー W杯の日韓共催や日本大衆文化開放を受けて活性化された日韓交流は、若い女性や大学生を中心に展開されることが多く、中高年層が日常において韓国の留学生や韓国文化に接することは容易ではなかった。  
 33) 小此木 (2005:36)。  
 34) 毛利 (2004:41-47)。  
 35) 金 (2007:161-162)。  
 36) 『論座』(2005.11:221-223)。  
 37) 島原 (2007:167-168)。  
 38) 三矢 (2004:17-18)。  
 39) 岩淵 (2007:151)。また、毛利・岩淵は、歴史や日韓関係など公的問題にほとんど左右されない韓流ファンの文化実践から「新たな韓国理解が生み出されている」として、韓流の波及効果を評価している (信田:21より再引用)。  
 40) 黄 (2007:268)。  
 41) 小倉 (2005:82-93) に詳しい。  
 42) 小川 (2006:234-237)。  
 43) 金 (2007:155-156)。  
 44) 岩淵 (2007:147-149)。  
 45) 大学生を対象として、韓流ファンのイメージについて調査を行ったところ、もっとも多かった意見が「生き生きしている」であった (金 (2007:160-161))。  
 46) 信田 (2005:22)。  
 47) 電通総研 (2005:7)。「世界価値観調査」は、世

界60カ国を対象に、社会・生活に関する価値観の違いを比較・分析するものであり、1981年から実施されている。2005年は5回目に当たり、全国の18-79歳の男女個人 (有効回答数、1096) が対象となった。

- 48) 島原 (2007:212-213)。  
 49) 同上。なお、<趣民>という表現は、秋葉原の街の景観や様相が変わった理由を分析した建築学者の森川嘉一郎の造語<趣都>からの発想だという (同:230)。  
 50) 島原 (2007:213)。  
 51) 山崎・藪根 (2007:7-8)。インターネット調査方法で、18歳から69歳までの男女個人 (全国) 1030人を対象に2007年7月9日-10日に実施している。  
 52) 山崎・藪根 (2007:10)。

#### <参考・引用文献>

- 石田佐恵子 (2007) 「韓流ブームのさまざまな語り手たち—他者表象と越境する文化—」石田佐恵子・木村幹・山中千恵編『ポスト韓流のメディア社会学』ミネルヴァ書房、pp.1-31  
 石田佐恵子・木村幹・山中千恵 (2007) 「巻末鼎談—あとがきにかえて」、上掲書、pp.229-245  
 岩淵功一 (2007) 『文化との対話—パワー・ブランド・ナショナリズムを超えて—』日本経済新聞出版社  
 木村幹「ブームは何を残したか—ナショナリズムの中の韓流—」石田佐恵子・木村幹・山中千恵編『ポスト韓流のメディア社会学』ミネルヴァ書房、pp.203-228  
 小倉紀蔵 (2005a) 『韓流インパクト—ルック 코리아 と日本の主体化—』講談社  
 同 (2005b) 「<純粹なるもの>への回帰願望—ペ・ヨンジュンという思想—」『論座』(2005年11月号) 朝日新聞社、pp.224-229  
 小倉紀蔵 (2007) 「韓流は何をもたらしたか」『民団新聞』(2007年7月4日付)  
 同 (2008) 『日中韓はひとつになれない』角川書店  
 小川順子 (2006) 「『文化』の秘められた大きな力を証明してくれたドラマでした」NHK衛星放送局海外ドラマ班編『「冬のソナタ」への手紙』アスコム、pp.232-238  
 小此木政夫 (2005.9.30) 「『壁』は溶けたその先に」『AERA臨時増刊 進化する韓流』(No.51)、

- pp.36-37
- 笠間亜紀子・京極理恵・菊池嘉晃ほか (2005.1.23) 「究極分析 私はこうしてハマった! 『ヨン様』 熱狂白書—ファン200人の証言／わが冬ソナ論『不安の代償』『女性崇拜ドラマ』』『読売ウィークリー』(64巻4号)、pp.10-19
- 金賢美 (2007) 「韓流と『親密性』の政治学—アジアの近代性とジェンダー—」徐勝・黄盛彬・庵途由香『『韓流』のうち外』お茶の水書房、pp.117-138
- 金恵媛 (2007) 「韓流の受容とブーム—中高年女性と大学生の観点から—」韓国日本文化学会『日本文化学報』(第35輯)、pp.151-170
- 島村麻里 (2007) 『ロマンチックウィルス—ときめき感染症の女たち』集英社新書
- 宋連玉・板垣竜太 (2005) 「流れる『韓流』、流れない『韓流』」『インパクション』(149号)、pp.6-25
- 大門孝司 (2005.2.1) 「韓国は韓流ブームをどうみているか—日本の韓流ブームはどうなるのか」『出版ニュース』(2029号)、pp.6-9
- チェ・チヨン (2005) 「韓流研究課題開発のための基礎調査」韓国文化政策研究院
- チョハン・ヘジョン (2003) 「グローバル地殻変動の兆候で読む韓流熱風」チョハン・ヘジョンほか『韓流とアジアの大衆文化』延世大学校出版部、pp.1-42
- 電通総研 (2005) 「マルチ・スタンダードな社会ビジョンを—サステイナブルな成熟社会へ」(『世界価値観調査2005』国内結果レポート)(株)電通総研、2005.12([http://www.dentsu.co.jp/di/archive/wvs/pdf/wvs\\_2005\\_1.pdf](http://www.dentsu.co.jp/di/archive/wvs/pdf/wvs_2005_1.pdf))
- 信田さよ子 (2005秋季) 「韓流ドラマと日本の家族」『小説tripper』(特集 気がつけば韓流)、pp.20-23
- 咸翰姫・許仁順、蓮池薫訳 (2006) 『冬ソナと蝶ファンタジー』光文社
- ハン・ギホ (2005.11) 「韓流・出版事情② 『負け犬』と韓国の自己啓発書」『論座』、pp.230-235
- 黄盛彬 (2007) 「補論 韓流本の世界」徐勝・黄盛彬・庵途由香『『韓流』のうち外』お茶の水書房、pp.251-287
- 林るみ (2005.9.30) 「独占インタビュー ペ・ヨンジュン 『四月の雪』から「愛」を進化させてゆく」『AERA臨時増刊 進化する韓流』(No.51)、pp.6-17
- 三井智一 (2006) 「異例尽くしだった日本語吹き替え版制作の舞台裏」NHK衛星放送局海外ドラマ班編『『冬のソナタ』への手紙』アスコム、pp.1-6
- 三矢恵子 (2004) 「世論調査からみた『冬ソナ現象』—『冬のソナタ』に関する世論調査結果から—」『放送研究と調査』(2004年12月号)、pp.12-25
- 毛利嘉孝 (2004) 「『冬のソナタ』と能動的ファンの文化実践」毛利嘉孝編『日式韓流—「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』せりか書房、pp.14-50
- 同 (2005) 「『冬のソナタ』陶酔の後に…多彩な韓国を知った」『朝日新聞』(2005年1月8日夕刊) <http://database.assahi.com/livrary2/topic/t-detail.php>
- 山崎聖子・藪根佐保子 (2007) 「インターネットと未来社会に関する調査」(株)電通総研 ([http://www.dentsu.co.jp/di/archive/other/pdf/publication\\_071012.pdf](http://www.dentsu.co.jp/di/archive/other/pdf/publication_071012.pdf))
- 李智旻 (2004) 「新聞に見る『ヨン様』浸透現象—呼称の定着と「オバファン」という存在」毛利嘉孝編『日式韓流—「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』せりか書房、pp.83-111
- 李鳳宇・四方田犬彦 (2005) 『パッチギ! 対談編—喧嘩、映画、家族、そして韓国—』朝日新聞社
- 「特集ペ・ヨンジュン 私たちは、どうなってしまうのでしょうか」『論座』(2005年11月号)、pp.214-223。